道徳だより

Do 徳？
どう説く？
道 talk.

テーマ：問いを子どもたちに考えさせる

令和７年７月
京都市立道徳教育研究会
広報部
（第２号）

道徳授業における中心発問の工夫　～問いを子どもたちに考えさせる～

6 月 25 日、「授業実践力向上講座①」を開催しました。今回のテーマは、道徳授業における中心発問の工夫についてです。 御室小学校の大平龍之介先生からは、子どもたち自身に中心発問を考えさせるという、主体的な学びを促す授業実践をご紹介いただきました。

子どもたちが自ら問いを立てることで、主体的で対話的な深い学びを実現し、ねらいとする道徳的価値にせまっていく魅力的な実践発表でした。講座の後半では、6 年生の教材「ロレンゾの友達」を題材に、参加者全員で中心発問について検討しました。実践に基づいた具体的な検討を通して、発問のあり方や授業構成への理解が深まり、大変有意義な時間となりました。

今回の道徳だよりでは、中心発問を考える授業づくりについてまとめます。子どもたちが自分で中心発問を考える授業は、最初は難しいかもしれません。でも、何度か経験するうちに、ねらいに迫る問いを自然と考えられるようになります。子どもたちが「このことをもっと考えてみたい！」と思える問いを大切にすること。自分たちで考えた問いで授業を展開することで、子どもたちの思考もぐっと深まります。ぜひ、授業実践してみましょう。

ポイント１　教材を読むときの「問いの視点」をもたせよう

子どもたちが自分で中心発問を考える授業をするとき、**教材を読む前に「問いの視点」をもたせておくこと**が大切です。例えば、授業の導入で、「今日のお話の中で、登場人物がどんなことで悩んでいたか、どんな道徳的な問題があったかを探しながら聞いてみよう」と声をかけてみてください。「問いの視点」を明確にすることで、子どもたちはただ教材を聞くだけでなく、「ここに問いがありそうだ」と気づくようになります。そして、問いが見えた場面を手がかりに「どこが問題だったのだろう？」「どのように考えたらよいのだろう」と思考が広がります。中心発問を考えること自体に意味があり、子どもたちは、自分なりの「問い」を立てながら、教材と深く向き合うようになります。

ポイント２　問いを精選する力を育てるために

子どもたちに問いを考えさせると、時には授業のねらいとはちょっとずれた問いが出てくることがあります。実際に「それは面白いけど、今日のねらいとは違うかも…」と、教師として困ってしまうこともあります。また、すぐに答えが出てしまうような「分かりきった問い」では、考えが深まらず、話し合いも広がりません。

そんなときこそ、子どもたちと一緒に問いを吟味する時間が大切です。問いを出し合ったあとに、「今日の授業のめあてに迫れそうな問いはどれかな？」とみんなで考えていくことで、問いの質がぐっと高まります。中心発問を考える授業に慣れてくると、子どもたちの問いもどんどん精選されていきます。そして、自分たちで「これは考えてみたい！」と思えるような、必然性のある問いをつくれるようになっていきます。問いをつくる力は、すぐには育ちません。でも、少しずつ経験を重ねることで、子どもたちは自分の問題意識をもとに、価値に迫る深い問いを生み出せるようになります。

ポイント３　感想交流から中心発問へつなげる工夫

中心発問を考えるとき、基本発問をいくつも用意するのではなく、感想交流の中で問いを見つけていくという方法も効果的です。たとえば、教材を読み終えたあとに、「気になったことは？」「考えてみたくなったことは？」と子どもたちに問いかけてみると、自然といろんな視点や疑問が出てきます。その中から、「この問いは、今日のねらいに迫れるな」と思えるものを中心発問にしていくことで、子どもたちの思いや考えが反映された、主体的な授業になります。また、感想交流をうまく使えば、基本発問で聞くような表面的な問いについては完結できるので、中心発問でじっくり話し合う時間もしっかり確保できます。子どもたちの声から問いを育てていきましょう。

ポイント４　補助発問で授業の舵を取る

子どもたちが考えた中心発問だけでは、授業の中で問題を深く追求するのが難しい場合があります。だからこそ、教師が「どのような問いが出てきそうか」をあらかじめ予想し、補助発問を準備しておくことで、ねらいとする道徳的価値に深く迫ることができます。

補助発問を考える際には、右の表にあるような役割を意識しておくと、授業づくりに役立ちます。

思考を深める	「どうしてそう思ったの？」などで、考えを掘り下げる
視点を広げる	「他にも考えられることはある？」などで、多様な見方
価値を揺さぶる	「もし自分だったら？」と、葛藤を体験させる
生活とつなげる	「似た経験ある？」などで、実感を伴った学びにする

ただし、こうした問いを準備するためには、何より教師自身が内容項目をしっかり理解し、授業のねらいや育てたい子どもの姿を明確にしておくことが重要です。「なんとなく問い返す」「できるだけたくさん問う」といった補助発問では、子どもたちの思考は深まりません。

教材を丁寧に分析し、内容項目に対する理解を深めることで、補助発問を通して何を考えていくのかが具体的にイメージできるようになります。

教師の補助発問によってねらいとする価値について深めていけるように、授業の舵取りを目指していきましょう。

（参考資料）　新発問パターン大全集（２０１９）明治図書

【文責　神山 庄太（太秦小学校）】